

# キリスト教の自然理解について

— 序章 —

今 井 晋

今日のように生態学的破局や環境破壊の危機が説かれ、環境倫理の急務が声高に叫ばれるとき、自然ないし自然環境はわれわれ人間にとつて、またなによりもキリスト者にとつて、それはもはや単なる「所与」ではなく「課題」として厳肅に自覚されなければならない。

従来、比較宗教という立場から、キリスト教と仏教を対照させて、前者の宗教としての深さは歴史観にあり、後者のそれは自然観にあると前提して、キリスト教の自然観は、仏教のそれに比肩しえない弱点を有するかのよう認識される傾向があった。

仏教界の碩学、鈴木大拙は「禅と自然」という論文<sup>1</sup>において、聖書の自然観を大要次のように批判する。「自然と人間の二者対立がどこから起つてきたかという点、私の考えでは、造物主によつて人間は一切の被造物を支配する力を付与せられた、という聖書の説〔創一章二六—二八〕からきている、と私は思う。西洋の人々が口を開けばいつも『自然を征服する』というが、これは根本的にこの説話に起因している。……この征服の観念は、一に人間と自然の

關係が力によるものであると考へるところから發するのだ。そしてこの力の關係のなかにこそ実は人間、自然相互の対立と破壊が深く蔵されているのである。」「バイブルが教えるところにしたがう限り、人間は神の『生き写し』として創られ、自然は人間によつて支配されるべきものとなつてゐる。そしてこの思想が実は人類悲劇の本當の發端なのだ。」「西洋においては、人間が自然のなかに入りこんでいたり、それと一つになつたりするような思想は全く見当らない。西洋の人々の心には自然と人間とは全く二つに分れたものなのである。』

以上のように近年、西欧社会の自然觀・人間觀が問題視されるとき、それはしばしばキリスト教と結びつけられて批判を受け、非難を浴びることが多いのである。

ついで、この鈴木大拙の思想的影響をも仄めかしている（訳書一五頁）、極めて衝撃的な著作<sup>(2)</sup>を刊行した科学技術史家リン・ホワイトに聞くことにする。これに収録された論文「現在の生態学的危機の歴史的根源」の一節には次のような主張がされている。（訳書八七―九二頁）

「物理的創造のうちのどの一項目をとつても、それは人間のために仕えるという以外の目的をもっていない。……人間は自然の単なる一部ではない。人間は神の像を象つて作られてゐるのである。キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知つてゐるなかで、最も人間中心的な宗教である。……人は神の自然に対する超越性を大いに分けもつてゐる。キリスト教は……人と自然との二元論をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張した。……西欧科学のその長い形成期のなん世紀の間、科学者たちが一貫して、科学者の仕事と報いは『神にならつて神の考へを追うことである』と言ひ續けてきたため、これが科学者の本當の動機であると信じるようになった。もしそうであるならば、そのときには近代的な西欧科学はキリスト教神学の母体

のなかで鑄造された。……いまから一世紀ちょっと以前に、それまでまったく離れていた活動であった科学と技術が一緒になり、多くの生態学上の結果から判断して、抑制のきかなくなる力を人類に与えたのであった。もしそうなら、キリスト教はとてつもない罪の重荷を負っている。「われわれの科学と技術とは、人と自然との関係に対するキリスト教的な態度から成長してきたものである。……キリスト教徒にとっては一本の木は物理的事実以上のなにもでもありえない。神聖な森という考えそのものがキリスト教に無縁のものであり、西洋のエトスに無縁のものである。二千年近くの間、キリスト教の伝道師は神聖な森を伐り倒してきた。それは自然に精神を前提するゆえ、偶像崇拜になるのであった。」

ホワイトは、現代の生態学的危機を招いた元凶としてキリスト教の「尊大な」(arrogant) 自然観を告発したのであり、当時、類似の非難は鎮まるどころか大合唱となり、しかもこれは、自然科学、神学、哲学などをまきこむ広汎な論争にまで発展するにいたった<sup>3)</sup>。

さて、ユダヤ・キリスト教の「人間中心主義」を主張するホワイトの論拠は、上述のように、「創世記」の創造の説話の記述に淵源する。しかも、ここに二つの論点があると指摘されている(村上陽一郎「前掲書」一〇三頁)。

その第一は、人間が「神のイメージ」(Imago Dei)として造られただけではなく、「神の命の息を吹き入れられた」存在として、同じように被造物ではあっても、自然物とは二重に区別される、決定的に特別な存在とされている。したがって人間は神の自然支配の意志や計画を、たとえすべてでなくとも知り、理解できるので、神の代理人として自然支配が許されるとみる立場についてである。

他は、ここで使用されている概念「すべての生き物を支配せよ」とか「地を従わせよ」(創・一―二八)という神の

命令であるが、「従わせる」「支配する」という邦訳は、緩やか過ぎる。subtle という英訳は「力で圧倒して征服する」ことであり、原語のヘブライ語でも、「血を流してでも無理やりに屈服させる」という意味に近い動詞だといわれる。J・パスモアも「従わせる」と訳されるヘブライ語は軍事的な意味を含む、きわめて強意のことばとして論じられるケースを紹介している。(パスモア前掲書五〇頁)ところがJ・H・ステファンによれば、「神の命令に現れる『支配する』(radah) という動詞は『踏みつける』という意味をもつにせよ)旧約聖書を通じて『被造物の搾取』というような物理的力に訴える強い意味では用いられておらず、むしろへ正義へ、へ抑圧からの解放へ、へシャローム(平和)が主題であるような文脈において、『正しい、責任ある支配』という意味あいで使われているという。実際、神が「支配」を命じたのは墮罪以前のことであるから、この「支配」はヘエデンの園の耕作・管理に對する責任と深く結びついたものはずであつて、かかる人と被造物との共生は、むしろエコロジーの関心にも沿う、と主張されている。

いずれにせよ、以上のような問題は言語の解釈学的分析だけで決定的な解決をなすうとは思われないのである。

ところがユダヤ・キリスト教的世界の人間中心主義に對して終始、厳しい批判と告発を続けたホワイトの著作に、解決の最後の可能性ともいふべき道が示唆されていることは注目し値する。それはかれ自身が「生態学者の聖者」に推したいとまでいふ、アッシジの聖フランシス(1181-1226)の精神である。

「おそらく、われわれはキリスト教史上、キリスト以来の最大の過激論者、アッシジの聖フランシスのことをよく考えてみるべきかもしれない。……フランシスを理解する鍵は個人としてだけでなく、類としての人間に對する謙遜の徳への信念である。フランシスは人間の被造物に對する、その専制君主の地位を廢位し、神のすべての被造物の民主主義を築こうとした。かれにあつては、蟻はもはや単なる怠け者に對する説教の種でなく、火も魂が神と合一しよ

うとして突進することの印ではない。いまやそれらは兄弟蟻であり姉妹火であり、それぞれにそれぞれなやり方で、ちようど人間の兄弟が自分なりのやり方で神を賛えるように、神を賛えているのである。」(ホワイト前掲書九三、九四頁)

聖フランシスにとって、神すなわち世界の創造者は、人間の發揮すべき謙虚さの究極の姿を人間に示すため、自ら「子」すなわちイエス・キリストとして受肉し、しかも大工の子という高からぬ身分を与え、最後は十字架上の刑死という最も屈辱的な死をとげた。これは人間のすべての罪の贖いであると同時に、人間が神の創造物のなかで特に優れ、他の被造物の上に君臨し、支配するというような、高ぶり、尊大さへの峻厳な戒めでもあった。かれはこのような思想の原点に立って、自然物とともに生き(共生)、人間に対するのと同じ愛によつて自然物に接することを主張し、かつ実践した聖者となったのである。

聖フランシスは、人間が自然を恣に搾取し、収奪し、支配し、征服することの「言い訳」あるいは「免罪符」のように使われてきた「地を従わせよ」という創世的根本理念を、その誤用、ないし悪用から救い出す、いわばキリスト教そのもののメシアの役割を果している、というのがキリスト者、ホワイトの最後の弁証のように思われる。

米国の高名な生物学者、R・デュボスは著書『目覚める理性、人間のための科学』において、ホワイト論文に言及し、科学と技術の救済のため聖フランシスにもどれと勧めているのは捨てばちであり、サンフランシスコのヒッピーは聖フランシスを自分たちの守護神にしており、ホワイトを予言者扱いしていると非難しているとのことであるが、これをもてホワイトの見解が、当時、米国の青年たちにかに大きな刺戟を与えたかがわかるであろう。

E・ベントツは聖フランシスについての評価を次のように述べる。被造物は、ともに神の手によつて造られたもので

あるという観点から、相互に連帯責任をもつという思想は、近世ヨーロッパ神学において、人間に与えられた特殊な支配の委託という思想によってほとんど完全に退けられてしまった。ヨーロッパの信仰思想上、右のような連帯関係が実践され、表明されたことは、わずかなカリスマ的人間を除いて、稀なことであった。そのカリスマ的人間のうち、この連帯的な兄弟関係を根本的に体得したのは聖フランシスであった。その証しとして、この聖者の詩「太陽の歌」をかける。

主よ、ほめたたえられよ、すべての被造物、わけても、兄弟なる太陽とともに……

主よ、ほめたたえられよ、姉妹なる月と星とのために……

主よ、ほめたたえられよ、兄弟なる風のために……

主よ、ほめたたえられよ、姉妹なる水のために……

主よ、ほめたたえられよ、兄弟なる火のために……

主よ、ほめたたえられよ、姉妹にして母なる大地のために……

主よ、ほめたたえられよ、姉妹なるからだの死のために……

(丘野慶作訳)

かつて、東西を代表する知性の「出会い」として、西谷啓治とG・マルセルの対話が実現したときも、聖フランシスの評価をめぐって完全に意見の一致をみたとの記録が3のこされている。その西谷啓治が「宗教とは何か」と題する宗教論集のなかで(三一〇頁)「太陽の歌」にふれて次のような含蓄の深い解説をしている。

「聖フランシスの有名な『太陽の歌』には、太陽や月などから水や火や風などに至るまでも兄弟とか姉妹とか呼ばれ

ている。それは単に詩人的な言葉の綾ではない。あらゆるものが実際そのように出会われたのである。かれには万物の一つ一つが、自分と一緒に神から創造されたものとして兄弟姉妹だったのだと思う。そして万物がそのように出会う場が開かれたのは、かれがかれのいわゆる「小さきもの」(minores)の立場、すなわち「何ものよりも小さい」もの、あらゆるものの下に立つものという立場を、徹底させていった結果にほかならなかった。つまり、神に自己を捧げ、自己を捨てていった究極に、そういう場が開かれたのである。それは決して汎神論ではなかった。聖フランシスの場合はキリスト教ではむしろ異例に属するのかもしれない。しかし、われわれは、宗教的な愛が人間の領域の外に出て、あらゆるものにもまで拡げられた少くとも一つの例を、そこに見出すことはできるであろう」。

以上のように、東西の代表的知性が、キリスト教の自然理解のモデルとして、聖フランシスというカリスマ的個性をあげている。なるほど、かれの、神による共同被造物として自然との兄弟姉妹意識の成立の場は、いわゆるminoresの立場、すなわち「何ものよりも小さい」、あらゆるものの下に立つものという立場の徹底、神を前にする自己否定の究極に現成する自然に対する大いなる宗教的愛であった。そしてこれはキリスト教にとって「異例に属する」ものであつてはならないのであつて、むしろ継受して普遍化し徹底化すべき精神財であると思われる。

ところで、このような自然理解は中世に見出されるのみならず、近世初頭の改革者ルターにも、この聖フランシスに比肩しうる、否より深い理解を見出すことが可能であると思われるのである。それを窺知する手がかりとして、ルターが「山上の説教」にこころみた解釈に注目したい。

〔マタイ五章・43〜48〕(WA 32, 404)

「わたし(神)が数えきれないほどの恩恵を、わたしのキリスト者に対してのみならず、わたしに感謝もせず、む

しろ、わたしの子や義しいキリスト者を最高に迫害するというような仕方では報復する悪人たちに対しても、示すということがあなたにわかるであろう。それだから、あなたは太陽を見て恥じ入らねばならない。太陽はこのことを、日々あなたに説教して聞かせるからである。また野に出て、小さな花や木の葉を見るときも恥じ入らねばならない。このことは、すべての葉や草に書き記されているからである。このことをあなたに示し、語りかけないほど小さな小鳥はいないし、小さな果実や穀粒もないのである。」

〔マタイ六章・26-27〕

「見よ、主は小鳥をわれわれの師匠、教師にしてください。福音書のなかで、取るに足りない雀が、人々のなかで最も賢い者に対して、学者や説教者となり、日々このことをわれわれの目や耳に教えるということは、われわれにとって大きな、永遠の恥である。……要するに、われわれは空にいる小鳥の数だけ師匠や説教者をもっているということである。そしてかれらは、その生きた範例でもってわれわれを恥じ入らせるものなのである。」

ルターにとつては、自然のものすべてが福音の教師であり、説教者であつて、これはまさに兄弟姉妹以上の関係を示唆する。

周知のように、聖フランシスは小鳥に説教をしたといわれている。ルターの場合には、小鳥が説教をしたのである。この対照の由来は、中世よりも、なお徹底された「帰無」の思想に導かれてのことである。すなわちルターは「フミリタス (humilitas) と信仰、このことばで問われているのは、われわれが全く無となり、万物に対して空にされ、われわれ自身を無化することだけである」(WA 56, 218) といつて、中世を貫いて伝承された主要概念「フミリタス」を究極まで徹底させ深化して、ひたすら神の前に無とされ、無となりきる絶対否定の立場と解釈するのである。<sup>9)</sup>

西谷啓治も前掲書(三〇四頁)において「かつてルターは、その『基督者の自由について』の冒頭に「基督者は万物の上に立つ自由な主であつて、何者にも従属しない」、「基督者は万物に仕える下僕であつて、すべての者の下に従属する」という二つの命題を掲げた。言うまでもなく、その二つの命題は同じことを言っているのである。信仰において神のもとに帰り、万物の上に立つ主人としての自由を与えられた者のみが、「自己」を無にされ「主体」としての自主性を否定されたその立場から、万物の下僕となり得る。逆に、「自己」を無にされて万物の下僕たり得る者のみが、神のもとにあつて、万物の主であり、万物の主体であり得る。そこに自己と万物との間の深い回互的關係が見られるであろう。」とルターの「無」の立場を弁証されているのである。

E・ベントツは言う<sup>90</sup>。仏教徒にとつて地の支配は端的に罪である。というのも人間の目標は世界を支配することではなく、世界と合一することにあるからである。しかしキリスト教においては、神は人間に世界の支配を委託する。ただし、そのかわりに、世界の支配は、本来、世界に対する人間の重い責任と結びついたものであり、しかもその委託は、墮罪前の人間に課せられたものである。しかるに墮罪した人間は神から与えられた自由を誤用して責任を全うすることができなくなつたのであつて、この責任はキリストによつて罪から救われた人間のみが担いうるものである。この認識によつて、技術文明がもたらした支配の乱用を克服しうるのである。そして重要なことは、支配は重い責任を伴うと言つたがこの場合、責任、特に他の被造物との、また他の被造物に対する連帯責任は、支配より上位にあるということである。聖フランシスが教えてくれたように、人間も他の被造物も兄弟關係にあり、相互に連帯責任を負うものである。しかも人間は「神の像」が与えられた特別の存在として、共同被造物に対する責任は重く、その重要度において責任が支配をしのぐのである。

現代のキリスト教界は、ホワイトへの反論もしくは自己弁護という消極的な姿勢からではなく、むしろ積極的に、キリスト教の理念そのもののなかに、与えられた自然に対する人間の重い「責任」を問う例が数多く見られるようになった。厳然たる神の命令「地を従わせよ」も「管理する」責任という方向に解釈するのである。英語の表現としては「ステュワードシップ」(stewardship)という語が使用される。人間が自然にとつての「管理人、僕、世話係」(steward)であることを神から委託されて、人間は神に対して「生態学的」な責任をも負わなければならないと理解することになるのである。

### (付記)

以上は「キリスト教の自然理解」について問題点の予備的考察を覚え書きとしてまとめたものにすぎない。震災後の多事多端に妨げられ、本論にまで及び得なかつたことを、このたびは御寛恕願いたい。これを序説とする本論の予定は、J・モルトマン(註3参照)の聖霊論的創造論を参考に、即ち今日の生態論的問題を聖霊論の神学的地平において展開する方向で考えたい。その際、手がかりとなるのは、宗教改革者、ルター、カルヴァンに関する下記の文献(モルトマンも引用する)である。

R. Prenter, Spiritus Creator, 1954

W. Krusche, Das Wirken des Heiligen Geistes nach Calvin, 1957

註

- (1) 『現代禪講座』(1956) 第一巻所収
- (2) リン・ホワイト著、青木靖三訳『機械と神』(1972)  
Lynn White, Jr., "Machina ex Deo", 1968
- (3) 論争の詳細を知るに足る代表的な著作を紹介しておく

J・パスモア著、間瀬啓允訳『自然に対する人間の責任』(1979)

J. Passmore, *Man's Responsibility for Nature*, 1974

本書は人間の自然理解と人間の自然に対する責任をテーマにして、古い人間中心主義的見解を内在的に批判、超克しようとする意欲的な試みを示した、哲学者による優れた文明論である。

G・リートケ著、安田治夫訳『生態学的破局とキリスト教——魚の腹の中で——』(1989)

G. Liedtke, *Im Bauch des Fisches, Ökologische Theologie*, 1979

著者は旧約学を基軸に自然科学との対話を試み、自然との関連において創造論の復権をはかり、西ドイツにおける「自然との和解の声明」を生み出す引き金となった。しかし、これは問題の多い一試論とみるべきである。

キリスト教の自然理解について(今井)

J・モルトマン著、沖野政弘訳『創造における神——生態論的創造論——』(1991) (J・モルトマン組織神学論叢 2)

J. Moltmann, *Gott in der Schöpfung—Ökologische Schöpfungslehre. Systematische Beiträge zur Theologie*, Bd. II, 1985

著者の組織神学大系の一環としての創造論であるが、今日の生態論的課題を聖霊論の神学的地平においてとりあげようとする。著者の極めて含蓄の深い神学的—宗教哲学的思惟には共感できることが多い。

村上陽一郎著『文明のなかの科学』(1994)

独創的な問題意識に導かれる文明論として注目を浴びた著者の近業である。著者は科学史、科学哲学の専門家として、ホワイトによる問題提起以降の論争の経過や神学界の反応などを総括した第II部は課題の究明に資するところ大である。

(4) L. H. Steffen, "In Defense of Dominion", in *Environmental Ethics* 14, 1992 pp.64-71

(5) 本論文では「聖フランチェスコ」は、すべて「聖フランシス」で統一した。

(6) リン・ホワイト、前掲書、一八五頁(訳者あとがき)

- (7) 佐藤敏夫著『キリスト教神学概論』一三三、一二四、一二五頁注(7)(1934)
- (8) 小島威彦編訳『マルセルにおける人間の研究』一五四頁  
 「西谷教授が、京都で私(G・マルセル)にこういうことをいった。それは『日本人と西洋人との間の一番大きな違いは、日本人にとっては自然が神聖なものである』ということだ。そこで私は直ちに西谷教授にこう答えた。『自然の神聖な神聖な性質は、私もまた、あなた方と同じように感じる事ができる自然の神聖さはキリスト教徒の精神を混乱させるようなものでは決してない。現にアッシジの聖フランシスは、自然のなかに内在するこの神聖なものについて、高度の感覚を具えていたのではなかっただろうか』と。私の話相手はすかさず、こういった。『まさにその通りで、西洋の聖者のなかでも、アッシジの聖フランシスが一番われわれ日本人を動かす聖者です』と。そして西谷氏は、自然のこの神聖な性質が汎神論的な意味に理解されてはならないと、それ以上の説明なしに短かく付け加えた。それは全くそのとおりであると私は思う。」(G・マルセル「私と日本との出会い」)
- (9) 参照 今井晋『ルターにおける「無」の思想について』  
 『ルター研究』第2巻、一九八六年)
- (10) 佐藤敏夫、前掲書一三九・一四〇頁